

第12回気象学史研究会「歴史史料としての気象資料」を開催

気象学史研究連絡会

第12回気象学史研究会「歴史史料としての気象資料」を日本気象学会2022年度秋季大会(会場:北海道大学)会期中の10月24日(月)に開催した。2019年10月の第6回研究会以来、3年ぶりに会場で開催することができた。当研究会では初の試みとしてオンラインでの中継を行った。会場約20名・オンライン約50名あわせて約70名の方が参加した。開催にあたり日本科学史学会北海道支部にご後援をいただいた。

今回は「歴史史料としての気象資料」をテーマとし、自然現象の記述にとどまらない、歴史史料としての気象資料の意味・利用可能性について認識を深めるため、北海道で防災関係の公務に携わる傍ら、地方史研究に取り組まれているお二方に、気象資料を利用した歴史研究について講演をいただき、議論を行った(第1図)。

國田博之氏(北海道渡島総合振興局)は「北海道の気象災害史と防災への活用」と題して講演した。1883(明治16)年の干害や1922(大正11)年の大雨災害、1915(大正4)年の黒嵐(くまあらし)などを、客観的な気象資料や新聞資料をもとに解き明かし、当時の人々の行動や世相を理解できる事例として気象キャスター時代に紹介したこと、道庁職員として主な気象災害について当時の気象観測成果や報道資料等を詳細に調査した結果に基づいて道庁の自然災害データベース(<https://kyouiku.bousai-hokkaido.jp/wordpress/2022.12.11>閲覧)の再構築を進めていることを報告した。その他にも、気象資料を地域防災に活用するための多彩な取り組みを紹介された。

山本竜也氏(札幌管区気象台)は「気象観測原簿にみる空襲記録」と題して講演し、気象官署の気象観測原簿を用いた2つの調査研究成果(山本 2015, 2018)

を紹介した。全国の空襲記録のあった日の観測原簿を網羅的に調べ、49気象官署の観測原簿に、火災に伴う気温上昇や湿度の下降等観測値の変化や、艦砲射撃や原爆投下による爆音の記録など、なんらかの形で空襲や戦争に関わる記録が残されていると報告した。また1945年7月14日、15日の北海道・東北空襲について各地の観測原簿から独自に天気図を作成し、米軍艦載機の戦闘行動調書と比較することによって、攻撃側の動きが天気に影響を受けていたことを明確に示した。気象観測原簿は各気象官署での保存から国立公文書館への移管が進められていること、撮影したマイクロフィルムがデジタル化されているが、国立情報学研究所ウェブサイト「デジタル台風:台風画像と台風情報」(<http://agora.ex.nii.ac.jp/digital-typhoon/genbo/2022.12.11>閲覧)での公開が2022年8月に開始され、閲覧が容易になったことも紹介された。

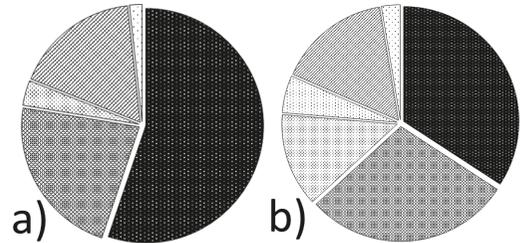


第1図 第12回気象学史研究会「歴史史料としての気象資料」(2022年10月24日・北海道大学大学院地球環境科学研究院講義室D201)にて講演された國田博之氏(a)と山本竜也氏(b)。(c)3年ぶりの会場開催で質疑応答も活発に行われた。

過去の災害や空襲などの歴史研究への気象資料の活用について多くの具体的な事例を紹介されたことで、気象資料の歴史資料としての役割について理解を深めることができたと考えられる。過去を振り返っての記憶や証言など歴史研究で利用される人間の残したさまざまな記録には錯誤や虚偽が含まれるおそれがあるが、気象資料がそれらと比べて正確性・客観性が高いことは、山本氏が講演で示したとおり広島原爆によると考えられる破裂音が210km離れた阿蘇山測候所の観測記録に計算上の時刻と1分変わらず記録されていることでも明らかである。「気象データはうそをつかない」(國田氏講演から)ことが、歴史史料として気象資料が重要な位置を占めることを参加者に強く印象付けたと思う。両氏の研究成果はこれまで気象学のアカデミックな世界とは別のところで発表されてきたが、歴史研究のさまざまな分野で気象資料が信頼できる資料として使われていることを示したものとしよう。

講演後の質疑応答も活発に行われた。やはり議論を行うには顔を合わせたコミュニケーションに勝るものはないことが痛感された。参加者アンケートからもそのことが見て取れる。オンライン中継に参加された方が8割であるが、「今後の気象学史研究会で、あなたにとって最も望ましい開催形式をひとつ挙げてください」という設問に対して「会場開催」、「会場開催のネット中継」が増えているように見える(第2図)。他方、オンライン中継参加者との議論はやや不活発となってしまった。オンライン中継参加の方も議論に参加しやすい環境を作ることも大事である。

当日はオンライン中継の準備に手間取り、機器操作にも不慣れで開会時間が遅れたほか、たびたび講演を途中で中断していただくことになり、ハイブリッド開催の進行にも不慣れで運営に拙い点が多々あった。それでも多くのみなさまのご協力でなんとか無事に開催でき、会場への参加が難しい方にもご参加いただけたことは評価したい。特にオンライン参加の方には不満が募ったと思うが、アンケートでは好意的な意見を多くいただいております。オンライン中継にはある程度の技術的対応が必要となるので、今回のような事前の準備に時間を取ることが難しい大会会場では安定して実施するには課題も多い。アンケートでいただいたご意見も参考に今後運営を改善していきたい。特に参加できなかった方から要望の多い講演動画の公開



- オンライン開催
- ▨ 会場開催のネット中継
- オンライン開催のパブリックビューイング中継
- 会場開催
- ▨ どれでもよい
- 開催形式に関わらず参加しない

第2図 第11回および第12回気象学史研究会参加者アンケート設問「今後の気象学史研究会で、あなたにとって最も望ましい開催形式をひとつ挙げてください」に対する回答の集計。(a) 第11回(2022年5月19日オンライン開催)、(b) 第12回(2022年10月24日会場開催+オンライン中継)、回答数はそれぞれ59、38(会場参加5、オンライン中継参加33)である。参加されなかった・できなかった方を対象としたアンケートも実施しているが、同じ設問についての回答の傾向は第11回および第12回で大きな違いは見られなかった(図は略)。

は、ご講演者のご理解ご協力を得て今回も実施することができた。

最後にご後援をいただいた日本科学史学会北海道支部、ご講演いただいた國田氏・山本氏、前回に続きボランティアとして運営にご協力くださった遠藤正智氏・岸 誠之助氏(順不同)の各位に厚く御礼申し上げます。日本気象学会講演企画委員会および日本気象学会2022年度大会実行委員会から多くの支援を受けた。特に大会実行委員会事務局長佐藤友徳氏には多大な技術的支援をいただいた。深く感謝申し上げます。本研究会の開催にあたっては気象学会の研究連絡会等活動補助金の支給を受けた。

参考文献

- 山本竜也, 2015: 1945年7月14・15日の北海道・東北空襲とその日の天候。空襲通信, (17), 2-11.
 山本竜也, 2018: 気象観測原簿にみる空襲記録。空襲通信, (20), 84-95.